

女性の場合は問題が社会的に表面化しにくく、家族は困っているながらも治療に消極的なためその実態や発症、増加要因が男性に比べて明らかでなく、治療対策の面でも遅れていることが指摘されている。

1986年1月から1992年6月までの6年半に入院した女性72症例の臨床像を検討した結果、女性のライフスタイルの多様化を反映して、過去の報告と多少異なってきた面と深刻な実態が明らかになった。

【入院者数の推移】年々増加傾向がみられ、今年は今日現在で21人と過去最高。

【生活背景】注目されたことは有職者の割合が39%と高く、職種も男性並にバラエティーに富んでいた点と、既婚者のうち49%が困難な婚姻状況にあって、色々な意味で自立せざるを得ない点であった。

【依存化過程】有職者の場合は習慣飲酒の契機が、晩酌と仕事のストレスを合わせると41%にものぼり、専業主婦とは異なった特徴であった。依存化のスピードは男性に比べて非常に速く、水商売経験の無い人58人中37人は習慣飲酒が始まって5年以内で問題飲酒に移行しており、さらにそのうち13人は1年以内という速さであった。このことは初めからアルコールを安定剤や眠剤のかわりとして飲むやり方と関係があると思われる。

【依存症状】離脱せん妄が26%、てんかん様けいれん発作が17%、連続飲酒発作が51%にあり、男性と比べて決して軽症ではない。

【身体疾患合併症】脂肪肝65%、高血圧24%、肝硬変11%の順であった。

【精神疾患合併症】摂食障害7%、うつ状態6%の順で、女性の特徴がでている。

【治療上の問題点】女性の場合はすでに夫婦関係が修復困難な程に悪く、家族の理解と協力が得にくいことが最大の問題であり、そのために短期入院になったり退院後の自助グループ参加と通院がなおざりにされている。

【予後】2年以上の断酒率は23%で、72人中6人が死亡。死亡者の年齢は50代が1人であとは全て40代であった。

【治療対策】家族関係がひどくこじれないうちに早期治療と自助グループ参加がポイントである。1991年1月に新潟市でもやっと女性だけの自助グループ『アメニストの会』が誕生したが、この会の問題点は当院の月例断酒会の中のみで開かれていることと、新潟市在住者が定着しないことである。病気のことを隠したい女性の心情を考えると、院外で匿名を名乗るルールで、主婦が出て来やすい平日の時間帯にも開かれるサブグループが今

後育っていくことを期待したい。

14) 薬物投与を行わずに軽快したトゥレット障害の症例

稲月まどか (黒川病院)
 七里佳代 (新潟大学精神科)
 三浦まゆみ (新潟大学保健管理センター)
 小泉 毅 (新潟県精神保健センター)

トゥレット障害または Gilles de la Tourette's Syndrome はチック症の特殊な一型でありながら、近年中枢神経系神経伝達物質障害の関与する器質的疾患と考えられるようになってきた。またトゥレット障害の治療においては一般に精神療法は無効とされ、薬物療法が有効であったという報告が多い。今回我々は、薬剤の副作用のため無投薬で経過観察を行なう事になった症例を経験した。症例の概要を表に示す(表1)。

2例とも多発性運動チックと音声チックを有し、トゥレット障害と診断されたが、EEG, CT 検査では症例2で脳波に徐波が混入していた以外は異常がなかった。また家族内力動は複雑で、患児がチック症状を持つ事で成員間の緊張が増幅していた。さらに2例とも発達障害を示唆する発達歴や認知能力のばらつきがあり、対人関

表 1

	症 例 1	症 例 2
性	男	女
発育歴	人見知り (-) 母の後追い (-) 言語の遅れ 多動 整理整頓が下手 無器用	多動 けが多い 幼稚 同年令の友人ができない
家族歴	なし	チックあり(父,母方祖母)
合併症	ぜん息 アトピー性皮膚炎	ぜん息 アトピー性皮膚炎
チック	音声チック 多発性運動チック	音声チック 多発性運動チック
初発	7才(音声チック)	8才(運動チック)
汚言	あり	なし
頭部CT	正常	正常
EEG	正常	徐波の混入
IQ	測定せず	95 VIQ < PIQ

係に障害を持っており、健全な児童に比べてストレスを受けやすいと考えられた。これらの点に注目して患児のストレスの開放に努めると共に、主に両親を通じて家族内の緊張関係を緩和するよう働きかけた所、患児のチックは軽快し、学業や対人関係、生活全般にわたって改善が見られた。トゥレット障害は器質因を基礎にその症状の発達や程度、経過には心理環境因が関与していると考えられるが、今回のように薬物を用いずに心理環境因の整理や改善だけでも劇的にチックが改善する症例がある事はトゥレット障害の治療において心理環境的アプローチも一考の余地があると考えここに報告した。

15) 母親に身体接触を求める分裂病患者について

田村 絹代 (五日町病院)
田辺 洋之 (長岡赤十字病院
精神科)
茂野 良一・伊藤 陽 (新潟大学
精神医学教室)

精神分裂病患者の中で、その経過中、特に母親に対して身体接触を求める者に遭遇することがある。今回我々はそのような行動が認められた9例の患者について、その臨床的特徴を明らかにし、身体接触行動の意味とそれを治療に生かす道を探ってみようとした。

〈結果〉 1) 9例中男性が6名、女性が3名で、発症年齢は1例を除いて17才～21才の間に分布していた(初診時年齢も同様)。男性の方が多いという結果については、男性患者が異性である母親に身体接触を試みた場合、母親自身がそれを受容し難く、問題行動としてとらえやすいためとも考えられる。

2) 病型は、破瓜型もしくは破瓜型近縁の病型が6名、妄想型が2名、分類困難型が1名であった。

3) 父親の特徴は、患者のことに無関心、厳しい、無口などの傾向が認められた。一方母親には、不安耐性が低いタイプと、明るくのんきで楽天的なタイプとが見られたが、とりつくしまもなく冷淡で拒絶的という母親ではないという点で共通しており、その意味で、患者にとって多少は情緒の通じる、受容の可能性のある相手であり、そのため身体接触行動が現れやすいのではないかと推察される。

4) 身体接触行動が現れる時期は、9例全例で、急性期の異常体験や興奮、緊張病性昏迷などが消褪した後の無為自閉的な時期(3カ月～2年半)であった。これは、身体接触が「精神病後疲弊期」に見られた、という永田らの報告と一致している。また症例の中には、母親への

身体接触行動が軽減・消失する過程で、井上らの報告に見られるような移行対象(猫など)が出現したり、大森らの云う「おどけ」の行動を示した症例もあった。

5) この時期の薬物治療として、9例中4例で、クロルプロマジンが身体接触行動に対しては比較的有効であった。その理由としては、急性期を過ぎたこの時期には、切れ味の鋭い薬剤よりも、むしろマイルドな鎮静がクロルプロマジンによって得られるのではないかと考える。

6) 治療的対応としては、分裂病患者の示す身体接触行動が、治療過程において重要であるというこれまでの諸研究(永田ら、大森ら、飛鳥井ら)を踏まえ、治療者が母親をサポートし、その行動をむげにはねつけず受容して行くよう、母親に促していくことが必要であろう。それはすなわち、身体接触による十分な保護や依存の充足が、傷ついた自我の再構成へと向かわせる、「育て直し」の意味を持っていると考えるからである。

〈まとめ〉 以上述べた臨床像が、身体接触行動の見られる患者に特異的なものなのかどうか、また仮説的に考察した点が妥当なものであるのかどうかについては、同様の症例をさらに集めて検討を重ねると共に、他のタイプの身体接触を示す患者や、身体接触行動を起こさない分裂病患者との比較検討が今後必要であろう。

16) デイケア10周年を振り返って —その活動報告と今後の課題—

滝浪 文子 (悠久荘精神科ソー
シャルワーカー)

はじめに：当院のDCは昭和57年9月に開始され昭和58年8月厚生省より精神科デイケアとして認可された。平成4年8月、10周年目に入り、それを記念し10月26日無事10周年記念行事を取り行い事が出来た。記念講演、昼食パーティー、シンポジウムと盛り沢山の内容をメンバーとスタッフが一緒になって取り組む事が出来たのは、長い10年という年月活動の積み重ねによるものだと思う。

今ここで10年目に入ってその活動内容を振り返り、その果たしてきた役割、問題点、今後の課題、そしてこれからの活動の進め方について考えてみたい。

活動の流れ：4～5人で始めたDCも10年目に入った現在では登録数59名にのぼり、毎日の参加者数は40名と増加している。退院後の受け皿、やすらぎの場、いこいの場、再発防止としての役割を担い、多くのメンバー・スタッフのかかわりの中で今日に至っている。

平成3年9月には増えてきたメンバーの中、参加の目的、ニーズ、年齢差の違いを考え、思い切ったプログラ